

## 文形成の深層・中国語の文形成（一）\*

馮 蘊 澤

### 1. 文形成について

#### 1.1 文という単位

本稿は文形成の深層、すなわち文形成のメカニズムについて考察するものである。議論のスムーズな展開のために、ここではまず議論の前提となる文と、文形成についての基本的認識について述べておくことにする。

言語のさまざまな単位（文、フレーズ、語）のなかで、文は「あるまとまった意味」（何らかの「事象」（event））を表す単位として、もっとも基本的な単位（言語学的単位）である。言葉を使うことは基本的に文を使うことであるとも言える。

文は、語やフレーズなど、より小さい単位を材料にして構築されるもので、表面から見れば、語やフレーズの連続である。他方、文の組み立て方には規定があり、語やフレーズを任意に並べて作られるわけではない。言語話者は長期にわたる言語生活のなかでこうした文に関する規定を習得し、だれもが正しい文を作って、使う知識を内的に持っている。このような知識は母語話者には無意識のうちに身につけるものだが、母語話者以外の人も学習を通じて、不完全ながらも、ある程度身につけることが可能である。

文を作る材料は語である。語も何らかの意味を持っている言語学的単位である。語に関する知識、例えば語の意味、品詞類型などの知識も言語話者が内的に持っている言語知識の一部である。しかし、語に関する知識と文に関する知識は大きく違う。一人の人が「知っている」語（理解語彙と使用語彙）の数は、個人差はあるものの、基本的に有限個である。「知っている」語はすべて脳の中の「辞

典」に貯蔵されており、必要な時にこれを引っ張り出して使うのである。語は、個々人が必要に応じて自由に、新しく作って使うことができない。脳に貯蔵されていない語は使うこともできなければ、理解することもできない。このため、語はしばしば「閉ざされた体系」と言われる。

しかし、文は違う。文のなかに、例えば「你好!」、「再见」、あるいは「初生牛犊不怕虎」、「青出于蓝胜于蓝。」のような定型文もある。このような定型文は基本的に語と同様、有限個であり、一つ一つ機械的に記憶し、記憶した中から引っ張り出して使うものであり、個々人が自由に「創作」することはできない。文の多くはこうした定型文ではなく、むしろ伝達の意図に応じて、その都度、自由に、新しく作って使う「創作文」である。我々が毎日使っている文のなかに、以前に聞いたり、使ったりしたことのあるものと同じものが偶然に含まれているかもしれないが、大多数はむしろ聞いたことも、使ったこともなく、その都度新しく作って、使っているものである。しかもその言語の話者ならば、常に適格な文を作り、決して間違いはしない。また、他人の言い間違いにも気づくことができ、訂正することができる。このため、一人の人が使うこと、理解することのできる文の数と類型については自分自身もわからない。理論的には無限に可能である。従って、文に関しては、語のように、知っているものをすべて収納した「文典」もなければ、必要に応じて「知っている」文のなかからそのまま引っ張り出して使っているわけでもない。文は必要に応じて、その都度自由に、新しく作って使っているのである。

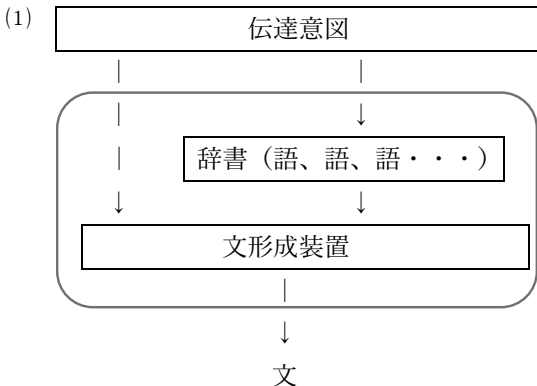
## 1.2 文形成の過程

上では、言語話者なら誰でも自分の言語の文に関する知識を持っており、このような知識をもとに、毎日無数に、新しい文を作って使っていると述べた。ところが、言語話者にとって、こうした文を作る知識は無意識のもので、自由に運用することはできるものの、そのメカニズムについて、自覚することも、説明することもできない、この点について、我々自身の毎日の言語行動を振り返れば簡単

に確認することができる。言語話者が文を作って使う過程を次のように述べる事ができよう。

まず、人は言葉を使って何かを伝えようとするとき、伝達しようとする意図に沿って、「知っている」語のリスト（レキシコン）の中から材料に使いたい「語」を選ぶ。選ばれた語を材料に、脳の中では「何か」が働き、伝達の意図に合った、意味的にも、形式的にも適格な文が自動的に構築され、表出されるのである。このように、言語話者の自意識とは無関係に、文は瞬間的に、自動的に構築されるのである。

このようなことから、人間が内的に持っている言語に関する知識のなかに、材料となる語のリストと並んで、ある種の「文形成装置」とでも呼べるシステムが存在するものと考えられる。言語話者が伝達意図に基づいて、辞書の中から材料となる語を選び、伝達意図と語が入力されると、システムが作動し、計算が行われ、文が形成されていくという装置である。文形成のこのような過程は概念的に次のように示すことができよう。



文形成に関する知識はこのように、言語話者の内面にあって、自分自身にとって自覚することも、説明することもできない無意識の知識であるため、外面から、

言語資料と言語行動に対して、観察、テスト、及び分析をしてはじめて明らかにすることができるものである。

このように、語に関する知識と文に関する知識が同じではないため、言語の記述においても、語に関する記述と文に関する記述の対象も同じではない。語に関しては、極端な言い方をすれば、脳のなかの「辞典」に収納されている有限個の語をリストアップするだけの作業である。しかし文は違う。脳の中に語のリストがあるのと同じように、必要な時にいつでも引っ張り出してそのまま使える「文のリスト」は存在しない。あるのは無限に可能な文を産出しうる計算システム、つまり文の作り方に関する「知識」である。このため、文の記述というのも、こうした計算システムの記述に他ならない。また、言語の習得、言語の学習というのも、語のリストとともに、こうした計算システムの習得、学習である。

### 1.3 統語成分分析の限界

中国語の構文分析では伝統的に、構造主義言語学の考え方をベースにした「統語成分分析」(「句子成分分析法」)があり、現在でも文構造分析の主流で、ある意味では唯一無二の存在ともいえる。統語成分分析は文の最も表層の形式を対象として、これをその構成成分とされる「統語成分」に分析し、それぞれの統語成分の特徴を列挙することで「記述」するのである。統語成分には位置、意味役割、及び品詞類型の三つの情報を持っているとされ、統語成分も基本的にこれら三つの情報を列挙し、いわば「三位一体」の概念として記述される。これまでの中国語「文法書」のなかで、比較的詳細で、丁寧な記述が行われているものに、劉、潘、故1983がある、以下は当文献における「主語」についての記述を整理したものである。(なお、当文献における「主語」の定義もまた事実上丁声樹1961を受け継いだものと思われる。) i は統語成分の位置、ii は意味役割、iii は品詞類型の情報についてそれぞれ述べるものである。(日本語訳、整理番号、カッコ内の注釈は筆者によるものである)。

- (2) i. 中国語では一般的に主語が前、述語はそのあとに置かれる。
- ii. 主語（の意味役割）は時には動作者であり、時には対象である。時には動作者でもなく、対象でもない。（中略）、主語は（述語の）陳述対象である。
- iii. ほとんどすべての実詞（名詞、動詞、形容詞）が主語になることができる。

上記のような記述について留意すべきことは、統語成分が持っていると思われる三つの情報の間の対応関係である。つまり、位置、意味役割、品詞類型の三つの情報のうち、位置情報（i）は比較的安定しているのに対して、意味役割（ii）及び品詞類型（iii）の情報は不安定で、とりわけ意味役割情報は多様である点である。

位置情報が安定的で、他の情報は不安定であることは、位置情報と他の情報が非対称性の対応関係にあることを示すものである。そしてやはり位置情報だけが安定的で、意味役割と品詞類型の情報が不安定であるため、いわゆる「統語成分」は事実上位置情報によって定義されているものであることが分かる。さらにまた、統語成分はこのように、事実上位置情報によって定義されているものであるため、位置情報と他の情報の非対称性対応関係は同時に、統語成分自身とそれが持つと思われる意味役割情報、品詞類型情報との間の非対称性対応関係を示している。以下、このような非対称性関係についてもう少し詳しく見てみることにする。

統語成分とそれ自身の意味役割情報の非対称性関係は大きく2つのパターンがある。一つは、統語成分の一つの類型に対して複数の意味役割情報が対応するという「一对多数の非対称性対応関係」で、もう一つは逆で、一つの意味役割情報類型が複数の統語成分類型に対応するという意味の「一对多数の非対称性対応関係」である。

まずは前者の、一つの統語成分類型に対して、複数の意味役割情報が対応する「一对多数の非対称性対応関係」についてである。これにもまたさらに2つのケー

スがある。一つは、同一の統語成分の意味役割は文によって異なることがあり、常に同じとは限らないというケースである。次の(3)が示すのはいわゆる「主語」という統語成分の意味役割情報の例である。同じ位置情報(述語の前)を持つ「主語」は文によってその意味役割はそれぞれ「動作者」、「経験者」、「所有者」、「所在者」となっていることが分かる。

- (3) a. [张三] 推了一把 李四。 [主語]=<動作者>  
 b. [张三] 喜欢 李四。 [主語]=<経験者>  
 c. [张三] 有 一辆 跑车。 [主語]=<所有者>  
 d. [张三] 在 健身房。 [主語]=<所在者>

次は、統語成分は類型によって、同一の文の中で複数共起することがあるというケースである。「状語」はこのような統語成分である。次の例のなかで、「状語」と認定される成分が5つ含まれている。ちなみに、伝統文法ではこれを「多項状語」の現象と呼ぶ。

- (4) 张三 [每个周末] [都] [跟朋友] [一起] [骑自行车] 去 西山。  
 |        |        |        |        |        |        |  
 主語 状語 状語 状語 状語 状語 述語 目的語

共起するこれら複数の「状語」成分はいずれも「主語と述語の間」という同じ領域内に配置される。また、互いの修飾・限定関係によっては、この「主語と述語の間」という領域内に限り、位置の交替が可能である(詳細は第3章で述べる予定である)。従って、事実上、複数の意味役割情報を担う成分(以下「意味役割成分」という)が同一の位置を共有する、あるいは同一の位置内に複数の意味役割成分が共起する現象である。統語成分分析も意味役割が異なるこれらの成分を同じ「状語」と命名する背景には、無意識的であるにせよ、このような認識が

あったに違いない。ここでいう「状語」は、その意味役割情報とは無関係に、単なる「位置」の情報であることは明らかである。従って、このような関係を正しく示すには、次のような構造表示が適切である。（詳細は第二部「中国語の文形成」参照。）

- (5) [张三] [周末 都 跟朋友 一起 骑自行车] [去] [西山]。
- |    |              |    |     |
|----|--------------|----|-----|
|    | └──────────┘ |    |     |
| 主語 | 状語           | 述語 | 目的語 |

次は、2つあるパターンのもう一つ、つまり、一つの意味役割情報類型が複数の統語成分類型に対応するという逆の「一对多数の非対称性対応関係」について見ることにする。次の(6)、(7)のそれぞれにある2つの文（aとb）のなかで、同一の意味役割成分がそれぞれ別の統語成分に対応していることが分かる。

- (6)      主語                  状語                  述語                  補語                  目的語
- a. | 张三 |                  . . .                  | 送 | 到了机场 | [几个客人]。 |
- b. | 张三 | 把[那几个客人] | 送 | 到了机场。 |                  . . .                  |

- (7)      主語                  状語                  述語                  補語                  目的語
- a. | 张三 | 在[黑板上] | 写了 |                  . . .                  | 几个字。 |
- b. | 张三 |                  . . .                  | 写 | 在了[黑板上] | 几个字。 |

(6)では、同じ「送る<対象>」である「几个客人」は、aの文では「目的語」に、bの文では「状語」に配置されている。(7)では、「書かれた文字」が残る場所（<着点>）である「黑板上」は、aの文では「状語」に、bの文では「補語」に配置されている。（本論における補語の解釈は従来の考え方と大きく異なるところがある。詳細は第二部「中国語の文形成」で述べる予定である。）

統語成分の類型と意味役割はこのように、非対称性の対応関係にあるため、これまでの「統語成分分析」に基づく記述、あるいは定義では、統語成分の類型に対して、対応する多様な意味役割情報を可能な限り集め、一々列挙するのが一般的で、あるいは唯一の方法であった。例えば「主語」の意味役割情報として、錢1982は12の類型を列挙している。他方、研究者によっては意味役割類型の認定に違いがあったり、または収集に意欲の差があるからであろうか、同じ統語成分に対して、列挙される意味役割の数や類型には差があり、諸説紛々で、研究者の数だけ異なる説があるという状況である。

このように、統語成分分析では、文を統語成分に分割した上、それぞれの統語成分の意味役割の列挙に終始してきた。他方、意味役割の列挙には以下の2つ疑問、あるいは課題を抱えている。一つは、いくら詳細に列挙したつもりでも、実際は列挙し尽くしているかどうかは不明で、列挙し尽くせる保証もないということである。そしてもう一つは、仮に列挙し尽くすことができるとしても、統語成分と意味役割の対応関係は「文によって異なることがある」ため、正しく文の形成を保証する記述となるためには、文によって異なるという「文の条件」をさらに明らかにする必要がある。しかし、これらいずれの課題も現時点では明らかではない、そして以下に指摘する統語成分認定自身の流動性、不確定性のため、今後も期待はできないと考える。

前述のように、統語成分分析は事実上位置の情報、しかも最も表層の形式における位置情報を中心に統語成分の認定を行う。他方、周知のように、表層の形式では、文の情報構造（情報の新旧、焦点の所在など）、語用論的要請などにより、条件付きながら、統語成分が移動、交替することがある。さらに、冗長性を避けるなどの経済性的原理により、意味的に実在する成分が形式上非顕現（省略）することがある。このため、表層の形式に基づく統語成分の解釈、認定自体に流動性、不確定性がある。これについてはもう一度「主語」を例にして見てみることにする。次の(8)の二文は動作事象を述語とする文における統語成分の標準的な配列の例である。



- (8) a. [我]去过上海, [我]没去过广州。  
 b. [我]吃了馒头, 没吃米饭。

この場合、位置情報によって、a、bいずれの文においても、述語の前の名詞成分「我」が「主語」と認定される。そしてその意味役割は「動作者」であるため、主語の意味役割リストにはまず「動作者」が記載されることになる。対して、次の(9)の二文（劉、潘、故1983）は明らかにそれぞれ(8)からの変形文である。

- (9) a. [上海]我去过, [广州]我没去过。  
 b. [馒头]吃了。(米饭没吃。)

(8)の標準的な配置に比べて、もともと目的語の位置にある「上海」/「广州」、「馒头」/「米饭」が文頭に移動されている。この場合、位置情報によって、文頭の「上海」/「广州」、「馒头」/「米饭」がそれぞれ「主語」という解釈を受ける（劉、潘、故1983）。そして、文中におけるこれらの新しい主語（「上海」/「广州」、「馒头」/「米饭」）の意味役割は「対象」であるため、「主語」の意味役割リストには新たに「対象」が加えられることになる。

次の動作事象を述語とする各文も、aが標準的な配置で、bはaからの変形で、文頭の名詞成分はいずれも他の位置から移動されてきた成分である。

- (10) a. [我]放在了窗台上一盆花。                      主語＝動作者  
 b. [窗台上]我放了一盆花。                      主語＝着点
- (11) a. [我]昨天买了一本书。                      主語＝動作者  
 b. [昨天]我买了一本书。                      主語＝時
- (12) a. [我们]对他的事已经尽了力了。                      主語＝動作者

b. [他的事]我们已经尽了力了。 主語＝対象

これまでの位置情報による統語成分の認定との整合性から、いずれも文頭の成分が「主語」と認定される。aの各文における主語の意味役割はそれぞれ「動作者」であるのに対して、bにおいては、文頭に移動された成分の元の位置（つまり統語成分の類型）はさまざまで、その意味役割もさまざまであるが、文頭に移動され、「主語」と解釈される以上、その意味役割情報も新たに「主語」の意味役割情報リストに追加される。これによって、主語の意味役割情報の範囲が次々と拡大されていく。このように、表層の形式上、移動された成分も、移動された新しい位置の統語成分として解釈される、よって、その意味役割も当該統語成分の意味役割情報としてリストに追加され、列挙されていくのである。さらに、次のような曖昧文（多義文）の存在も、意味役割情報の列挙をより複雑化し、一層困難にしている要因の一つである。次の文は、表層の形式からはa、bの二つの意味解釈が可能である。

(13) [那个小孩儿]追得我上气不接下气。

a. 那个小孩儿追我，我上气不接下气。

b. 我追那个小孩儿，我上气不接下气。

つまり、文頭の名詞成分「那个小孩儿」は、位置情報の特徴により、統語成分としてはいずれも「主語」と解釈されるが、意味役割としては「動作者」としても、「対象」としても解釈可能なので、多義文となる。このような場合も、解釈可能な意味役割をすべて「主語」の意味役割リストに追加される。

このように、意味役割類型の認定自身に恣意性があり、困難があることに加えて、表層形式における位置情報による統語成分類型自身の認定も上記のように流動性、不安定性の側面があるため、統語成分の意味役割情報類型も無限に広がり、列挙することをより一層困難にし、前述のように、いくら詳細に列挙したつもり

でも、列挙し尽くしているか不明で、列挙し尽くせる保証もない理由である。

意味役割情報の完全な列挙はこのように困難な状況にあるためか、そこでやむなく用いられるのは前掲劉、潘、故1983のような包括的で、曖昧な表現による記述である。参照の便宜上、以下再度引用しておく。

- (14) i. 中国語では一般的に主語が前、述語はそのあとに置かれる。
- ii. 主語（の意味役割）は時には動作者であり、時には対象である。時には動作者でもなく、対象でもない。（中略）、主語は（述語の）陳述対象である。
- iii. ほとんどすべての実詞（名詞、動詞、形容詞）が主語になることができる。

ここで注目したいのは、意味役割情報に関する記述である。位置情報についての表述が相対的に明示的であるのに対して、意味役割の情報については、「時には動作者であり、時には対象である。時には動作者でもなく、対象でもない」といった曖昧で、不確実な表現に留まっている。このことはつまり、統語成分には何らかの意味役割の情報を持っていることは認めるものの、それぞれの統語成分にどのような意味役割情報をもっているか、結局のところ、不明であることを認めていることを示すものである。特に、最後には「主語は述語の陳述対象である」として、意味役割とは異なる範疇の概念で締め括ろうとしているところは、明らかに意図的な概念のすり替えである。そもそも述語とは、「何かについて陳述する」成分である、その主語となる成分の具体的な意味役割がなんであろうと、すべて陳述の対象であるので、このような記述は意味役割について何も述べていないのに等しい。翻訳すれば、「主語の意味役割についてはあらゆる可能性がある」ということになる。このような表述はある意味では意味役割情報の記述の放棄の表明であり、諦めの現れである。

なお、公平を期すために付け加えておかなければならないが、定義が困難であるにもかかわらず、曖昧さを残しながらも、統語成分の概念を「定義」した上で

使う劉、潘、故1983はまだ丁寧なほうで、良心的である。定義が困難であることを暗黙の了解としつつ、「主語」、「述語」、「目的語」といった概念を明確に定義をせず、あるいは意図的に定義することを避けて使う専門書、教科書も散見される。その代表格として北京大学中文系『現代漢語』(1993、2004)を挙げることができる。

#### 1.4 統語成分の概念と文形成

文法書の記述が上記のように、曖昧で、不確実性はあるが、母語話者にとっては特に何か不都合があるわけではない。母語話者にとって、文法書とは文法学者が決めた文の分割、分類の方法を覚え、文法の試験の際の「正解」を見つけるためのルールブックにはなるものの、文法書の記述に基づいて文を作って、毎日の言語生活を送っているわけではない。文に関する知識、つまり、如何にして適格な文を作るかという知識は、母語話者であれば、無意識的でありながら、内在の知識としてすでに持っているからである。

ところが、母語話者と同じ言語知識を持たない非母語話者が文法書の記述に基づいて文を作ろうとする場合、上記のような文法書の記述はほとんど役に立たないことが想定される。例えば、ある非母語話者が前掲劉、潘、故1983の教えに従って、次の(15)にある意味役割成分を使って中国語の文を作ろうとすると、(16)以下のような困難に遭遇することであろう。

(15) 「卖」〈動作〉

「张三」〈動作者〉

「豆腐」〈対象〉

まず、i の記述により、「主語」、「述語」、(及び「目的語」)の配置は次のようになっていることが確認される。

## (16) 主語＋述語＋目的語

問題は、意味役割成分の配置である。ii の記述によれば、主語は、「時には動作者であり、時には対象である。時には動作者でもなく、対象でもない。」とあるので、可能性としては次の2つの選択肢が提示されていることになる。

## (17) 主語＋述語＋目的語

张三 卖 豆腐。

\*豆腐 卖 张三。

明らかに、bの選択肢は中国語としては不適格である。責任回避のため「保険」として定義には「時には」という記述はあるが、「時」とはどのような「時」を指すかは不明である。

さらに、iii の記述（「中国語ではほぼすべての実詞が主語になることができる。」）に従えば、次のような実際にはありえない配置も許されると理解されても仕方がない。

## (18) 主語＋述語＋目的語

\* 卖 张三 豆腐

\* 卖 豆腐 张三。

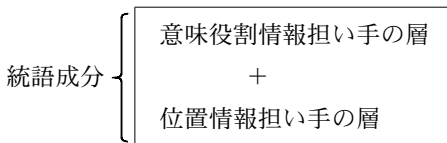
つまり、記述は不適格な文の形成を許してしまい、適格な文の形成を保証することはできない。明かに、「文形成装置」（文形成のメカニズム、計算システム）の説明には非有効的である。非有効的である事実、記述は言語話者が持っている言語知識を正しく、あるいは十分に反映していないことを意味する。

文形成のメカニズムの解明にはより深層の事実の解明が必要である。

## 1.5 統語成分の重層性と文形成の課題

統語成分の位置情報と意味役割情報が上記のように非対称性対応関係にある事実は、両者は表裏一体の関係ではなく、それぞれには担い手があり、より深層のレベルでは別々の階層に分かれていて、互いに非対称性対応関係にあること示している。「統語成分」とは、これら二つの階層に分かれている二種類の要素が結合した結果であり、表層の現象である、故に、「統語成分」には位置情報と意味役割の情報を持ち、しかもこれら二種類の情報が非対称性の対応関係にある理由である。統語成分内部のこのような成層関係は次のように示すことができる。

### (19) 統語成分内部の成層構造



従って、文形成メカニズム解明には、意味役割情報を担う要素とその体系、位置情報を担う要素とその体系、及び二つの層の対応関係、結合のプロセスの解明が課題である。本論では以下4つの章に分けて、これらの問題をそれぞれ取り上げることにする。

## 2. 意味の構造と形式の構造

### 2.1 意味単位、意味成分、意味単位の構造

文は意味の面においては意味の単位である。意味単位としての文は<動作>や、<動作者>、<対象>、または<時間>、<場所>、<動量>など、何らかの意味役割の情報を持つ、より小さい成分——意味成分に分析できる。例えば、次の(20)の文は(21)ように5つの意味成分に分析される。

(20) 张三经常给李四做好吃的。

(21) 做く動作＞

张三く動作者＞

李四く受益者＞

好吃的く対象＞

经常く頻度＞

ちなみに、意味成分の意味役割とは、当該意味成分を担う言語単位である語やフレーズが固有する「語彙的意味」（あるいは辞書の意味）と違って、語やフレーズなどが文のなかで意味成分を担うことによって新たに生じる（あるいは与えられる）「構文的な意味」である。語彙的意味はその語が用いられる文が違ってても基本的に変わらないのに対して、意味役割は、当然のことながら、次のような例が示すように、同じ言語単位でも、それが用いられている文によって常に同じとは限らない、むしろ逆で、文が変われば変わるのが通常である。

(22) 张三 推了一把 李四。

李四 推了一把 张三。

また、ここでいう「意味成分」はいわゆる「統語成分」とは同じ概念ではない。伝統文法は表層の言語形式を対象に、ポーズや間投詞などの挿入成分の可否という形式上の特徴を根拠に文を「統語成分」に分析する（趙元任 1980、柴谷方良・影山太郎・田守育啓 1982）。他方、意味成分とは意味単位としての文の構成成分であり、分析の根拠はあくまで意味役割の情報である。文の意味はそれを構成する個々の意味成分を認識し、意味役割情報を読み取ることで理解される。なお、意味成分の類型は形式上、語順、機能語、品詞類型、さらに意味成分を担う言語単位の語彙的意味など、何らかの形や情報で示され、これらの形式と情報を手掛

かりに認識、識別されるものと思われる。

従って、このような意味において、意味単位としての文はより小さい構成成分である意味成分から構成される「意味成分の集合」である。また、意味単位としての文はこのように、より小さい構成成分から構成されるので、構造があり、意味の構造である。意味成分には意味役割の情報を持っており、意味成分の類型もそれ自身の意味役割情報によって定義される。意味成分の構成は文によって異なり、そのパターンは文の数だけあるといえる。(それゆえ、文と文の意味が異なるのである。)

このように、文は意味の面においては意味成分からなる構造体である。文構築の第一歩も、伝達の意図に基づき、意味成分の構成を決め、意味成分の担い手となる言語単位（語、フレーズ）を選び、意味役割を与え、意味単位としての文を構築するものと思われる。

## 2.2 形式、形式成分、形式の構造

### (1) 「意味成分配置領域」——形式成分

文は形式上、意味成分が一行に並んだ形で現れる。形式上における意味成分の配置は言語によって自由度に差があるものの、何らかの規定があり、完全に自由ではない。中国語のような「孤立型」の言語は特に語順に関して規定が厳しいものとして知られる。例えば、次の例の4つの配列のうち、a以外は中国語としてすべて不適格な配列である。

- (23) a. 张三 做 实验。  
b.\*张三 实验 做。  
c.\*做 张三 实验。  
d.\*做 实验 张三。

つまり、意味成分は類型（意味役割情報）によって配置位置が決まっており、



簡単に位置の移動、交替が出来ないことを示している。

一方、第1章でも言及したように、文内部のある領域において、その領域内にある成分間の意味関係（修飾、限定関係）が許される限り、ある程度、交替が可能な意味成分もある。次の(24)の {・・・} 内にある意味成分はこのような成分である。

- (24) a. 张三 { 这几天 一直 一个人 在实验室里 } 做 实验。  
 b. 张三 { 这几天 一直 在实验室里 一个人 } 做 实验。  
 c. 张三 { 这几天 一个人 一直 在实验室里 } 做 实验。  
 d. 张三 { 一个人 这几天 一直 在实验室里 } 做 实验。  
 e. 张三 { 在实验室里 这几天 一个人 一直 } 做 实验。

上記のような事実は以下のことを意味する。

i. 文は形式上、抽象的な「意味成分配置領域」という形式上の成分が存在する。（以下「配置領域」という）。配置領域は一列に並んだ形となっており、それぞれには位置の情報をもち、互いが自身の位置の情報によって区別される。意味成分と配置領域の間に対応関係があり、このような対応関係に基づき、意味成分はその類型によって所定の配置領域に配置されるようになっている。これによって、意味成分と形式成分が結合し、表層の形式上では、位置、意味役割、及び品詞類型の3つの情報を持つ「統語成分」として現れる。位置情報は配置領域が持つ情報であり、意味役割情報はその内部に配置される意味成分が持つ情報である。なお、意味成分は語など、何らかの言語学的単位によって担われるので、それを担う言語単位固有の品詞類型の情報を持つ一方、配置領域自身にも品詞類型に関する制約があり、品詞類型の情報はこれら2種類の情報を反映したものである。（詳細はこの後の「2. 形式成分の品詞類型に関する規定」を参照されたい。）

ii. 配置領域とその内部に配置される意味成分の関係は、1つの配置領域内に1つの意味成分だけ配置される「1対1」の対称性ある対応関係と、1つの配置

領域に2つ以上の意味成分が共起可能という「1対多数」の非対称性関係の2種類ある。上の(23)は前者の1つの配置領域内に1つの意味成分だけ配置される「1対1」の対称性ある対応関係の例で、(24)は後者の1つの配置領域に2つ以上の意味成分が共起するという「1対多数」の非対称性関係の例である。上記(23)と(24)の各文に対して「配置領域」の情報 {・・・} を入れると、それぞれ(25)、(26)のようになる。

- (25) a. {张三} {做} {实验}。  
b. \* {张三} {实验} {做}。  
c. \* {做} {张三} {实验}。  
d. \* {做} {实验} {张三}。
- (26) a. {张三} {这几天 一直 一个人 在实验室里} {做} {实验}。  
b. {张三} {这几天 一直 在实验室里 一个人} {做} {实验}。  
c. {张三} {这几天 一个人 一直 在实验室里} {做} {实验}。  
d. {张三} {一个人 这几天 一直 在实验室里} {做} {实验}。  
e. {张三} {在实验室里 这几天 一个人 一直} {做} {实验}。

配置領域自身の規定性が強く、自由に移動、交替はできない。よって、(25)のような、1つの配置領域内に1つ意味成分しか配置できない場合、配置領域自身の移動、交替ができないため、表面から見れば、これらの枠に収納されている意味成分の移動、位置の交替はできないように見える。他方、(26)のように、同じ領域内に複数の意味成分が配置される場合、意味成分同士は「その領域の内」であれば、ある程度自由に移動、交替ができるので、表面から見た場合、意味成分の移動、交替が可能のように見える。

このように、文は意味の面から見れば意味の単位で、「意味成分の集合」であるのに対して、形式の面から見れば、抽象的ではあるが、意味成分を収納するた

めの「配置位置」の連続である。配置領域内に意味成分が配置されるので、文とは、正確には、「その内部に意味成分を収納した配置領域の連続である」と述べるができる。配置領域の連続は文の形式の構造を成しており、一つ一つの配置領域はその構成成分で、「形式成分」である。（以下「形式成分」という。）そして、配置位置の規定が厳しいのは意味成分自体ではなく、それを収納する「形式成分」のほうである。

意味成分の構成は文によって異なり、文の数だけパターンがあるのに対して、形式成分の構成は一つの言語において1つのみである。少なくとも中国語のような孤立型の言語では、ここまで見てきたように、形式成分の位置に関する規定が厳しく、形式構造を構成する形式成分の数及び類型は決まっている。（それゆえ、形式成分の位置情報がその内部に収納される意味成分の類型ないし意味役割を示す手段として機能することが可能なわけである）。

一列に並んだ形で配置される形式成分はそれぞれ位置の情報を持っており、位置の情報によって特徴づけられ、互いが区別され、定義される。ちなみに、中国語は全部で6つある。詳細は第2部の「中国語の文形成」にゆづらなければならないが、中国語における形式成分の配列、すなわち形式構造は次のように表示することができる。

(27)  $\{+2\} + \{+1\} + \{0\} + \{-1\} + \{-2\} + \{-3\}$

张三	每周	去	三次	健身房	---	。
张三	---	看	---	书	（看得）很累	。

上記のように、6つの形式成分は $\{0\}$ を中心に、左側（前）には2つ、右側（後ろ）には3つという具合に、ほぼ均整のとれた配置になっていることが分かる。 $\{+\}$ と $\{-\}$ は $\{0\}$ との相対的位置関係（ $\{+\}$ は $\{0\}$ の左側、 $\{-\}$ は $\{0\}$ の右側）を表す。さらに $\{1\}$ 、 $\{2\}$ 、 $\{3\}$ は $\{0\}$ との相対的距離（数字が小さいほうは近い、大きいほうは遠いこと）を表す。中国語のような言語では、「語

順」の情報が「統語成分」類型の表示に役に立っていることは周知の通りだが、(本来は「語順」の情報は形式成分類型の表示に機能し、形式成分類型の情報はさらにその内部に配置される意味成分類型の表示、及び識別の手がかりになっていることである。) ここでいう「語順」とは、第一には {0} 成分とそれ以外の成分の違い、第二には {0} に対して、左かと右かの違い、さらに {0} との相対的距離の違いという3種類の情報によって定義されるものである。これら3種類の情報を表すには上記(27)のような表示が明示的で、形式成分をより厳密に定義することができることが分かる。

なお、前述のように、伝統文法で「統語成分」として用いられる「主語」、「述語」、「目的語」などは、位置、意味役割、品詞類型の3つの情報を持つとされながらも、実質的には位置情報によって定義される概念である。このため、これらの概念を単なる位置情報を表すものとして定義し直したうえで、形式成分を表す概念として用いることも可能である。統語成分の位置情報と本論の形式成分類型との対応関係を示すと、次のようになる。

- (28) {+2} + {+1} + {0} + {-1} + {-2} + {-3}
- |    |    |    |    |     |    |
|----|----|----|----|-----|----|
| 主語 | 状語 | 述語 | 補語 | 目的語 | 補語 |
|----|----|----|----|-----|----|

なお、上の表示でも分かるように、伝統文法における「補語成分」の定義は不明確な部分があり、整理する必要があるが、これについては第2部で詳しく見ることにしている。

また、前の節では、意味成分は類型によって形式成分との間に対応関係があり、構文の過程で対応関係にある形式成分にそれぞれ配置され、表層の「統語成分」になると述べた。ここでは一つ疑問が生じるかもしれない、つまり、文の統語成分の構成は文によって異なり、その数が理論的には無限に可能であるのに対して、それを収納する形式成分は有限個で、形式の構造は一つの言語において一つのみである。従って、有限個の形式成分がいかにして無限に可能な意味成分を

収納できるようにしているか、という疑問である。

前の節ではすでに言及したように、意味成分と形式成分の対応関係は、形式成分内部に収納できる意味成分の数によって、大きく二種類ある。一つは、一つの形式成分内部に一つの意味成分のみ収納する類型で、大多数はこのような対応関係である。もう一つは、一つの形式成分内部に二つ以上の意味成分が収納可能な類型、すなわち複数の意味成分の共起が可能な類型である。{+2}（状語）がこのような形式成分である。次は {+2}（状語）にそれぞれ1～5つの意味成分を収納している例である。

- (29) a. { 张三 } + { 在实验室 } + { 做 } + { 实验 }。  
 b. { 张三 } + { 一个人・在实验室 } + { 做 } + { 实验 }。  
 c. { 张三 } + { 一直・一个人・在实验室 } + { 做 } + { 实验 }。  
 d. { 张三 } + { 这几天・一直・一个人・在实验室 } + { 做 } + { 实验 }。  
 e. { 张三 } + { 这几天・一直・一个人・在实验室・替老师 } + { 做 } + { 实验 }。

なお、同一の形式成分（{+2}（状語））の内部に共起できる意味成分は、ある程度条件があるものの、交替可能であることは上の(26)ですでに確認している。

このように、形式成分の類型によって、同一の形式成分の内部に複数の意味成分が共起できる場合もある（すなわち1対多数の非対称性関係である）ので、形式成分の類型が有限個であるにもかかわらず、一つの文内部に含まれる意味成分の数は理論的には無数に可能な理由である。

## (2) 形式成分の品詞類型に関する規定

ここまでは形式成分の位置情報について見てきた。形式成分には位置情報のほかに、品詞類型に関する規定もあることを示す事実がある。この点について、以下 {+2}（状語）を例に観察することで理解できる。次の(30)の {+2}（状語）に配置される「正在」、「经常」、「有点儿」はいずれも副詞成分である、これらの

副詞成分は前置詞や助詞などの機能語を必要とせず、原型のまま {+ 2} (状語) に配置することが可能であることが分かる。

- (30) a. 张三 正在 写 作业。  
b. 张三 经常 去 健身房。  
c. 张三 有点儿 紧张。

他方、次の(31)のように、{+ 2} (状語) の位置には名詞性成分「李四」をそのままの形の配置することはできず、(32)のように、前置詞を添加して、前置詞フレーズの形が要求される。(前置詞の類型は当該成分の意味役割によって選ばれる。)

- (31) a. \*张三 李四 写 作业。

- (32) a. 张三 [给]李四 写 作业。  
b. 张三 [替]李四 写 作业。  
c. 张三 [为]李四 写 作业。  
d. 张三 [和]李四 写 作业。

つまり、形式成分に配置される意味成分を担う言語単位は、品詞類型によって原型のままで配置可能であるのと、機能語の添加によって変形を要求するものがあるということである。このような事実は、形式成分には品詞類型に関する規定があることを示すものである。つまり、形式成分に配置される意味成分は何らかの言語単位 (語やフレーズ) によって担われ、もともとはその言語単位固有の品詞類型の情報を持っている。他方、配置する形式成分にも品詞類型に関する規定がある。形式成分とそれに配置される意味成分の品詞類型情報が合致する時には、意味成分はそれを担う言語単位の原型のまま (無標の形)、合致しないとき

は、機能語（前置詞、助詞）の添加による変形（有標にすること）が要求される、ということである。{+2}（状語）には副詞はそのままの形で配置できることは、当該形式成分の品詞に関する規定は「副詞」であることを示すものである。対して、名詞には変形を要求することは、名詞は当該形式成分の品詞類型の情報に合致せず、よって、前置詞を添加して、その「名詞である」形式を変える必要があるのである。このような操作（前置詞の添加）はある意味では一種の「副詞化」操作であると理解することができる。ほかには、例えば {+2}（状語）に配置される形容詞性の成分には助詞「地」の添加を要求したり（高兴 → 高兴地）、あるいは「重ね型」（高兴 → 高高兴兴）にしたりする変形も同じ理由によるものであると考える。（なお、中国語のような孤立性性格の強い言語では、品詞類型の情報は形式成分、ないし意味成分類型表示手段の一つであるので、最終的には隣接する他の形式成分及び意味成分との違いを明示的に示し、混同を避ける役割を果たしているものと思われる。これらの点についても、詳細は第2部の「中国語の文形成」に譲ることにする。

このように、形式成分には位置の情報とともに、品詞類型に関する規定もあるので、表層のレベルでは、意味成分と形式成分の結合である「統語成分」に意味成分が持つ意味役割の情報のほかに、形式成分の持つ位置の情報、品詞類型の情報も具有し、「位置、意味役割、品詞類型」の3つの情報を持っているとされる理由である。

\* 本稿の執筆に当たり、査読者から大変貴重なご助言をいただきました。記して深く御礼申し上げます。

## 【参考文献】

(一)

北京大学中文系现代汉语教研室(编)2004《现代汉语》商务印书馆

丁声樹1961:《現代漢語語法講話》商務印書館

馮蘊澤2003: <現代漢語單句生成的理論模式>《文学・言語学論集》9-2 熊本学園大学

何元建2007《生成語言學背景下的漢語語法及翻譯研究》北京大學出版社

黃伯榮・廖序東1991《現代漢語》高等教育出版社

黎錦熙1933《新著國語文法》商務印書館1992

林祥楣1991《現代漢語》語文出版社

劉月華・潘文娛・故韓1983《實用現代漢語語法》外語教學與研究出版社

錢乃榮(編)1995《漢語語言學》北京語言學院出版社

沈陽・馮勝利2008《當代語言學理論和漢語研究》商務印書館

沈陽・鄭定歐1995《現代漢語配價語法研究》北京大學出版社

袁毓林1998《漢語動詞的配價研究》江西教育出版社

趙元任1980《中國話的文法》丁邦新譯 香港中文大學出版社

(二)

チャールズ J・フィルモア1975『格文法の原理』(田中春美、舟城道雄 訳) 三省堂

井上和子・原田かづこ・阿部泰明1999『生成言語学入門』大修館書店

柴谷方良1978『日本語の分析』大修館書店

柴谷方良・影山太郎・田守育弘1982『言語の構造—理論と分析—』くろしお出版

小泉保2007『日本語の格と文型』大修館書店

池上嘉彦1975『意味論』大修館書店

中右 実(編) 1998『格と語順と統語構造』研究社出版

中村捷・金子義明・菊地朗1989『生成文法の基礎』研究社出版

島井克之2008『中国語教学(教育・学習) 文法辞典』東方書店

北川義久・上山あゆみ2004『生成文法の考え方』研究社

馮蘊澤2015「補語・補語構文の構築」『文学・言語学論集』22-2 熊本学園大学



## 内 容 提 要

语言，表面上是通过句子、短语、词、或者语音所表现出来的一种物理形式。在心理上，语言是一种内在的、潜在性的知识。前者是一种派生的现象、后者才是派生出现象的原因或根本。因此、对于语言的描写的最终目的也应该是对表面现象的观察达到对内在的有关语言的知识解释与合理的描写。

语言单位由形式和意义两个方面构成。作为语言单位的表面形式，句子以及“句子成分”也具有形式和意义的两个方面的因素。因此，有关句子的分析、描写，归根结底也是有关形式和意义的关系的描写，即、形式怎样来表达意义，或者说，意义怎样通过形式来表达。

语言的形式和意义呈一对多数的非对称性关系，即，句子的同一个形式可以用来表示不同的意义，同一个句子成分类型可以对应不同的语义功能。语言单位的这种一对多数的非对称性关系表明，形式和意义各自自由独立的成分（语意成分和形式成分）构成，各自具有独自的结构（语义结构和形式结构），因而分别属于不同的层面（语义层面和形式层面）。语义成分依其自身的类型与形式成分之间具有一定的对应关系，依据这种对应关系，语义成分与形式成分相结合，形成表面形式上的“句子成分”，因此，所谓“句子成份”是分别处在两个不同层次上的意义成分和形式成分相结合的产物。也正因为如此，句子分析的任务也不外乎以下三点，即：一、由语义成分构成的句子的语义结构，二、由形式成分所构成的句子的形式结构，三、语义成分与形式成分的对应关系。

